

しもつがの「まなびの WA！」

令和7年 11月4日

「WA！」には、輪、和、話、環などの意味合いを含め、管内の学校や教職員のつながり、温かい交流、情報交換の広がりなどをイメージしています。

発行：栃木県教育委員会事務局下都賀教育事務所

特別第4号

石川副主幹のお薦めする本

①『ディズニー おもてなしの神様が教えてくれたこと』 鎌田 洋 SBクリエイティブ

ディズニーランドのホスピタリティの秘密は「おもてなしの神様」が握っていた！本書では、ディズニーランドのキャストが、純粋にゲストのハピネスを願う、文字どおり「表も裏もない」気配りの心を学んでいく様子を、3編の感動物語を通して紹介しています。

個人的に、ちゃんと時間をかけて読んだ最後の本だったと記憶しています。「サービス」と「おもてなし」は違う。学校現場で毎日たくさん子どもたちとかかわる教師にとって、とても大切な要素が詰まった内容で、心にストンと落ちたのを鮮明に覚えています。

また、今後たくさんの人との関わりの中で成長していく子どもたちにとっても、ディズニーに関わる題材で親しみやすく、よりよく生きるためのヒントになると思います。



②『野村ノート』 野村 克也 小学館



故・野村克也氏が、選手・監督を経験して 50 年にわたる球界生活で得た原理原則をまとめた伝説のメモ。知将ならではの野球理論と上司としての管理術が数々あり、野村イズムの全てが詰まった圧倒的な代表作です。

はじめは部活動で勝ちたくて手に取った本でした。しかし、読み進めているうちに野球理論だけではなく人材育成についてのポイントがたくさん盛り込まれており、教員としてどう子どもたちと向き合うか、あらためて考えるきっかけとなりました。

③『きみの友だち』 重松 清 新潮文庫

わたしは「みんな」を信じない、だからあんたと一緒にいる――。足の不自由な恵美ちゃんと病気がちな由香ちゃんは、ある事件がきっかけでクラスのだれとも付き合わなくなった。学校の人気者、ブンちゃんは、デキる転校生、モトくんのこと何となく面白くない……。優等生にひねた奴。弱虫に八方美人。それぞれの物語がちりばめられた、「友だち」のほんとうの意味をさがす連作長編です。

「友だち」について、深く深く考えさせられる本です。子どもたちがこれから生きていく社会の中で、たくさんの人と関わりながら本当の「友だち」を見つけてほしいと言う願いで学級文庫に置きました。



櫻井副主幹のお薦めする本

①「あおのいえ」 作：いとうみく 童心社

あおは、お母さんの弟のなおくんと、なおくんのパートナーのしずさんと暮らしている。「あおくんちって、ふくざつだね」という友達の一言に、子どもなりの疑問をもつあおくんですが、そのときの、しずさんとあおくんの言葉のやりとりが、とても温かい。そして、「家族のかたち」について、改めて考えさせられます。

昨今、多様な考え方が認められつつありますが、それでもちょっとしたところで違和感を覚えることはあると思います。

「ちがうのは あたりまえ」

「おなじように 見えるだけで、ほんとうは おなじなんて ひとつも ないんじゃないかな」

そんなふうに、自然に感じられる子どもに育ってほしいという願いを込めて、この本を選びました。低学年から読める内容ですが、先生方にもおすすめします。



②「シリアの秘密の図書館」 作：ワファー・タルノーフスカ 訳：原田 勝 くもん出版

レバノン内戦を経験した著者が、シリア内戦下のダラヤという町で、実際に起きた出来事から着想を得て創作した、物語絵本です。

内戦で家を失い、地下シェルターでの避難生活を余儀なくされた主人公のヌールとアミールは、恐怖と不安に苛まれる人々を励ますため、秘密の地下図書館を作ろうと思い立ちます。瓦礫の中から本を集めて完成した地下図書館は、困難な状況下でも、人々に安らぎと希望を見出す場所となりました。

今や、電子書籍で手軽に本が手に入る時代。わざわざ図書館に行く必要性を感じない方もいらっしゃることでしょう。しかし、本に囲まれた空間のもつ特別感、スマートフォンやタブレットでは得がたいものです。子どもたちには、ぜひ図書館で、わくわくしながら本を選ぶ経験をたくさんしてほしいなと思います。

挿絵が色彩豊かで美しく、心に潤いを与えてくれる一冊です。

③「先生の夢」 編：日本ドリームプロジェクト いろは出版

北海道から沖縄まで、各都道府県 47 人の先生の夢がこの 1 冊に詰まっています。20 年近く前に買った本ですが、私自身、何度も元気をもらいました。先生方はもちろんですが、先生を目指している方や、先生がどんな思いで働いているのか知りたい子どもたちにもおすすめです。

「中学生の夢」「家族への夢」などシリーズで数冊出版されているようですので、学級文庫によいかもかもしれません。



④「ペット・サウンズ」 作：ジム・フジーリ 訳：村上春樹 新潮社

先日、アメリカのバンド「ビーチボーイズ」の中心的メンバー、ブライアン・ウィルソンの訃報をラジオで知りました。そのことがきっかけで読んでみようと思った本です。まだ読み始めたばかりです。

この本には、1966 年に発表されたアルバム「ペット・サウンズ」についてのエピソードが詰まっています。アルバムを聴きながら読むことをおすすめします。教育書ではありませんが、一見、教育とは何の関係もなさそうところからヒントを得ることも私はあるので、あえて紹介させていただきました。

